コロナ禍でもアグロフォレストリー事業で植えたバナナで、とりあえずお腹は満たすことができています。（レイクセブ町先住民族学校で）

ビラーン通信
104号
2021年 1月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会
（英文名略称・ＨＡＮＤＳ）
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11
TEL & FAX:045-500-9151
E-mail:hands-mindanao@nifty.com
http://hands-mindanao.a.la9.jp/
郵便振替口座　00210-5-72693
加入者名：ビラーンの医療と自立を支える会

長引くコロナ禍とフィリピンにかかわるNGOの課題・現地のニーズ

日比NGOネット学習会に参加して

日本で世界で新型コロナ感染拡大が続き、コロナ罹患による死者の増加とともに、ヒトとモノの流れが滞ることによる犠牲者も増える中での年明けとなりました。また、私たちのようなNGO活動においても大なり小なり資金面の影響を受けていて、昨秋9月には日比NGOネット/JPNからアンケートが届きました。

上期末の仮決算をもとに前年比を出してみました。4－9月の収入は約2割減でした。高齢化で会員数が漸減している中での2割は自然減の範囲ですが、ハンディクラフト事業収入ゼロという数字は、上半期の春夏にはもともとイベントが少ないとはいえ初めてです。

JPN加盟団体の中には、マニラなど都市部の貧困層を対象とし、主たる財源をスタディツアーやフェアトレードに求めているNGOもあります。３密が避けにくい都市部では、コロナ感染拡大、支援のニーズ増大の一方で、ヒトとモノの流れが止まることによる活動資金減少等コロナの影響がより強いようでした。

アンケート結果を受けて、10月には、「コロナ禍におけるフィリピン支援のための資金調達NGO間での経験共有と新財源の開拓方法について考える」、続いて12月には、「コロナ禍におけるフィリピン政府の貧困層支援およびNGOとの協力」をテーマとしたJPNオンライン学習会が開催されました。

都合で参加できなかった前者については、マニラ等都市部の貧困に取り組むNGOの事例報告の要旨が届き、ミンダナオの山岳部辺境地域を主たる活動対象とする当団体とは異なる、ある意味でより深刻なニーズとその資金調達について学ばせていただきました。

一方で、フィリピン政府の社会福祉開発省（DSWD）次官 グッドマリン氏を招いての12月の学習会では、これまで現地パートナーから聞く機会がなかった現金支給等コロナ禍支援政策がわかり参考になりました。

辺境にある先住民族の村のコロナ問題

12月に入りCMIP事務局のチャリスからしばらくぶりで連絡が入りました。「込み合うジープニーでの通勤は命がけ」と、自主欠勤による返信の遅れを詫びたもので、CMIPの支援対象、山岳部ビラーンの村とは異なるジェネラルサントス市中心部におけるコロナ感染へ警戒心の強さを感じました。

一方で、レイクセブ町辺境にある先住民族学校校長のアニータ先生から連日届く写真報告には、マスク姿はあまりみられません。ビラーンもチボリも辺境の村は感染が少ないだけではなく、ヒトとモノの移動が前提の商品経済への依存度が低いため、平時においては、お金がないと困る教育や医療支援のニーズが大きいものの、コロナによる経済的ダメージは都市部ほどではありません。

特に、かつてアグロフォレストリー事業支援をした村では、バナナが実り、樹木作物の間作、根菜類の収穫で少なくとも飢えだけはしのげているようです。一方で、ハンディクラフト販売で教育や医療費を賄っていた世帯などではコロナ禍の影響は大きく、ハイスクール中退などが増えています。

また、山岳部のコロナによるハンディキャップとしては、プリント教材やオンライン受講への対応が難しいケースがあり、奨学生の中退や入学直後の退学が増えました。

年が改まっても収束の見通しがたたないコロナ禍での現地支援の参考にと、左欄で触れたフィリピンにおけるいわゆる公助について、アニータ先生とボニファシオに確認してみました。一部不確かな情報があるかもしれませんが、レイクセブ町では障がい者、高齢者、一人親世帯への一律5000ペソ（約1万円）の現金支給が、ボルールがあるコロナダル市でも給与所得者を除き現金支給や米30kgの現物支給があったということです。

現地のまた国内のコロナ起因のニーズに対して、今後ともより実効性ある公助に期待し、また「助け合い」により、人類の一体感が強まる1年になることを願っています。（山崎）